令和八年報恩講法話

親鸞聖人の時代　1

正信寺　石川英和

令和八年十一月二十三日　正信寺　報恩講　法話

親鸞聖人の時代　1

石川英和

【はじめに】

ご多忙のところ、本日も報恩講にご参列いただきありがとうございます。

歴史の先生と懇意になり、鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鑑』を読む会に毎月参加させてもらっています。

今日は、親鸞聖人が生きた時代について、『吾妻鑑』で得た知識を重ね合わせて思いを巡らせました。その中で、親鸞聖人がどのように信心を得て来たのか、歴史背景を重ね合わせて、自分なりに想像してみました。これは、歴史を辿るお話ですが、個人的な見解が挟まれていますので、ご容赦いただければと思います。少々長くなるので、二回に分けてお話しいたします。

なお、文中で、後白河天皇と後白河法皇と使い分けますが、天皇在位前は皇太子、天皇在任中は天皇、天皇が後進に権力を移譲すると上皇、上皇が出家すると法皇という呼び名になります。

【親鸞聖人の家柄】

親鸞聖人は、承安三年（１１７３年）京都の日野に生まれます。

昨年の報恩講で、「浄土真宗御旧蹟巡り」のお話しをしましたが、お生まれになったのは、京都の法界寺（ほっかいじ）周辺です。法界寺に、親鸞聖人が産湯を使ったとされている井戸があり、臍の緒を埋めたえな塚もあります。京都の六地蔵駅から徒歩三十分くらいのところにあります。その近くに、今は焼失して学校になってしまいましたが、藤原道長が建立し、本堂が法華堂で、三昧堂や多宝塔や鐘楼を備える壮大な浄妙寺というお寺がありました。親鸞聖人が藤原氏と縁があることも偲ばれます。

先ほど拝読した『御俗姓御文（ごぞくしょうおふみ）』には、

「藤氏（ふじうじ）として、後、長岡の丞相（しょうじょう）　内麿公（うちまろこう）の末孫（ばっそん）、皇太后宮（こうたいこうぐう）の大進（だいしん）有範（ありのり）の子なり。」

とあります。

後、長岡の丞相というのは、奈良時代から平安時代初期にかけて活躍した公卿・藤原内麻呂（ふじわらうちまろ）のことです。後に藤原北家が繁栄する最大の礎を築きました。天皇に重用され、平安京遷都後、右大臣として朝廷の政治を取り仕切りました。人望が厚く、穏やかで優雅な人物であったと記録されています。親鸞聖人は、藤原内麻呂の子孫ということになります。

そして、親鸞聖人は、日野有範の子です。

日野家は、天皇家に仕えた藤原北家の家系ですが、有範の官位は従五位下ですから、公家としては下級に属します。しかし、皇太后宮職とは、天皇家を支える立場の、天皇家に大変近い存在です。大進はその実務を司る役人です。

親鸞聖人の幼少期は平清盛が太政大臣になり、いわゆる平氏が権力を振るった時代です。同じ時期に、後白河法皇が院政を敷いています。こ

の時代を語るうえで、その前に勃発した保元・平治の乱について触れる必要があるでしょう。

この二つの乱は、貴族中心の政治から武家政治へと移行する大きな転換となった内乱です。

【保元・平治の乱】

１１５６年の保元の乱では、鳥羽法皇の薨去（こうきょ）の後、皇位継承の問題や摂関家の利益対立で、朝廷が二つに割れ、武力衝突になりました。後白河天皇と崇徳（すとく）上皇の権力争いで、後白河天皇側が勝利しました。このとき、後白河天皇側に着いたのが、平清盛、源義朝（よしとも）でした。崇徳上皇側に着いたのは、源義朝の父の為義、源義朝の弟の為朝、さらに、平清盛の叔父の平忠正（ただまさ）でした。源氏も平氏も身内で分かれて戦いました。

崇徳上皇は、保元の乱で敗れた結果、讃岐の国へ配流されてしまいます。

崇徳上皇が詠んだ歌で、小倉百人一首に選ばれている一首に「瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ」（７７番）があります。川の流れが岩にぶつかって一度分かれても再び一つになるように、「今は愛する人と離れ離れになっても、いつか必ずまた結ばれると信じている」という意味の情熱的な恋の歌という解説が一般的ですが、この歴史を知ると、天皇家が保元の乱で分裂してしまっても、いつかは一つになるという意味に聞こえてしまうのは私だけでしょうか。

保元の乱の後、後白河上皇の側近であった信西（しんぜい）と、彼に武力で協力した平清盛（たいらのきよもり）が権力を独占していました。これに不満を抱いた貴族の藤原信頼（ふじわらののぶより）と、源義朝が結託し、信西を排除するクーデターを計画します。

平清盛が熊野詣のために京都を留守にしていた隙をついて、源義朝が挙兵（１１５９年）し、信西を自害させ、後白河上皇や二条天皇を幽閉して一時的に実権を握りました。しかし、知らせを聞いた平清盛が急いで京都へ引き返し、天皇・上皇を救出して形勢を逆転させました。

平清盛の軍の前に源義朝らは敗走し、藤原信頼は死罪、源義朝も尾張国（現在の愛知県）で家臣に裏切られて殺害されました。この戦いに勝利した平清盛は朝廷内で絶大な権力を握り、日本の歴史上初めて武士が政治の実権を握る平氏政権の基盤を築きました。

義朝の息子である源頼朝は伊豆へ流罪となり、幼かった源義経は京都の鞍馬寺へ預けられることになります。

【平清盛の圧政と日野有範の出家】

保元・平治の乱を経て、平清盛の権力基盤は固まり、朝廷内の権力、すなわち、天皇の即位に関しても口出しするようになります。

後白河天皇には三人の男子がいました。以仁王（もちひとおう）が優秀で知られ、本来ならば有力な皇位継承候補でした。しかし、平家の血を引いていないため不遇な扱いを受けました。平清盛は自らの娘、平滋子（たいらのしげこ）を女御として入内（じゅだい）させ、後白河天皇の子として高倉天皇を生みます。高倉天皇は清盛の義理の甥にあたるため、平家の強力なバックアップを受けてわずか８歳で即位しました。これは、仁安３年（１１６８年）で親鸞聖人が生まれる５年前です。

平清盛は朝廷への影響力をさらに強め、権力を振るいます。朝廷の中には、平清盛の政治に不満を持つものが多数いました。

日野有範が仕えたのは、後白河天皇の後宮に入り、中宮、つまり現在

の表現では皇后となった藤原忻子（ふじわらの　よしこ）であると推測されています。藤原忻子は、公卿の徳大寺公能（とくだいじ　きんよし）の娘で、近衛天皇の皇后、藤原多子（ふじわら　の　まさるこ）の異母妹にあたります。

藤原忻子は、後白河院と平清盛を権力的につなぐ架け橋として巨大な政治力を持っていました。そのため、彼女の身の回りを世話する日野有範の皇太后宮職のポストは、平家が朝廷内の情報や主導権を握るための極めて重要な政治的拠点となっていたのです。

残念ながら、忻子には子供が生まれませんでした。後白河天皇の次の実権は、平家の血を引く高倉天皇へと移っていきます。

さらに、忻子の実兄である徳大寺実定（とくだいじさねさだ）は、平清盛の妻、時子の姉妹を母に持つため、平家と極めて近い関係にありました。

つまり、朝廷の主要ポストや忻子の組織のトップである大夫（たいふ）や事務官の大進などは、平家一門や徳大寺実定のような超大物貴族が身内で固めてしまいます。いわゆる課長クラスの大進で平家とのかかわりの少ない日野有範がどれだけ実務に励んでも、最高幹部へ出世する道は閉ざされていました。

高倉天皇が即位し、藤原忻子が皇太后から北山院へと身分が上がると、それまであった皇太后宮という役職がなくなり、北山院のための女院庁（にょいんのちょう）という新しい組織へ移行します。これに伴い、有範は職を失った可能性が高いとされています。

日野氏は学問の家柄だったので、当時の政治の主流から外れていました。有範が職を退いた後、生活は困窮したと伝えられており、のちに有範自身も出家して三室戸大進入道（みむろとだいしんにゅうどう）と称して隠棲（いんせい）します。

実父の日野有範が職を辞して隠棲したあと、日野家の家督を実質的に継いだのが範綱（のりつな）でした。

範綱は朝廷で三河守（みかわのかみ）などの受領（ずりょう）という地方官、のちには後白河院の法住寺殿（ほうじゅうじでん）を管理する法住寺別当（べっとう）などを務め、平家全盛の厳しい時代の中で、なんとか日野家の血筋と家格を維持していました。

経済的に行き詰まった弟・有範の子である親鸞聖人とその弟たちを不憫に思った範綱は、彼らを自分の猶子（ゆうし）、今でいう養子に近い関係として引き取り、日野家の邸宅で養育しました。

【鹿ケ谷（ししがたに）の謀議】

平清盛の権勢に不満を持つ武将が、安元３年（１１７７年）６月京都東山の鹿ケ谷で謀議をしたことが発覚し、藤原成親（なりちか）、平康頼（やすより）、西光（さいこう）、俊寛（しゅんかん）ら院近臣多数が処罰され、後白河法皇も事件への関与を疑われました。

このとき日野範綱も厳しく詮議されて、播磨の国に流罪になっているという説もあります。これには、異説を称える学者もいます。ただ、親鸞聖人が４歳で父親と別れたという話がありますので、この時期の話です。親鸞聖人は範綱の猶子となっていますので、話としては辻褄が合います。

範綱が流罪になれば、日野家の限られた財力では、男児たち全員を公家として出世させることは不可能であると現実的にしたようです。

そこで範綱は、当時のエリートコースである仏門に親鸞聖人とその兄

弟らを送り込むことで、一族の生き残りを図ったのです。比叡山は当時の仏門としては最高位でした。親鸞聖人の弟の尋有（じんう）や兼有（けんう）なども、同じように範綱の手によって出家しています。

そして、治承四年（１１８０年）の夏に後白河法皇の第三子、以仁王が平家打倒の令旨（りょうじ）を発します。この令旨は、平氏一門を「王位を簒奪（さんだつ）し、仏法を破滅させる存在」として糾弾し、全国の源氏や比叡山延暦寺や園城寺（おんじょうじ）などの大寺院に向けて蜂起を促す命令書です。簒奪とは、本来継承する資格がない者や順位が低い者が、武力や政治的圧力によって君主の地位や権力、支配権を無理やり奪い取ることです。この令旨により源頼朝が伊豆で挙兵します。石橋山合戦では敗戦しますが、頼朝の軍勢は鎌倉に入り勢いを増して、富士川合戦で平家を破ります。これは、親鸞聖人が７歳の年になります。

令旨を発した以仁王は、平家に追討されました。しかし、後白河上皇の子供で、天皇の候補だった以仁王は宮廷の御簾（みす）の向こうにお座りになられるので、武将はだれも顔を見たことがありません。捕らえられても本人かどうかの首実検ができず、追討されたかどうかが分かりませんでした。九条兼実の日記『玉葉（ぎょくよう）』では、建久７年（１１９６年）正月十五日に、「乱から十六年が経過した建久七年になっても以仁王は「刑人（けいじん）」と呼称されて謀反人としての扱いを受けている」という記述があります。

【南都焼討から源平合戦】

平家の悪政に辟易とした東大寺や興福寺は源氏を頼りにします。それに腹を立てた平清盛は、平重衡（たいらのしげひら）に東大寺や興福寺などの南都の仏教寺院を焼討にすることを命じます。これが、歴史に言う「南都焼討」にあたります。

平清盛は、翌年の治承五年（１１８１年）に熱病で没します。これを境に平氏の衰退は明らかになって行きます。

翌年、寿永元年（１１８２年）に平家追討の宣旨が後白河法皇から発せられます。治承四年に以仁王が発した令旨が私的な反乱の呼びかけだったのに対し、最高権力者である後白河法皇の命令である宣旨（せんじ）または院宣（いんぜん）は、国家としての正式な公認を意味しました。これにより、源氏の戦いは正義の戦い、すなわち官軍となりました。

木曾義仲の軍勢が京都に迫った際、平家一門は安徳天皇と三種の神器を連れて西国へと都落ちをしました。

『平家物語』や『吾妻鑑』に詳しく記載されている通り、いわゆる源平合戦が勃発します。

最初は一ノ谷の合戦です。鵯越（ひよどりごえ）の逆落としの奇襲で、平家は瀬戸内海に敗走します。

次に、屋島の戦です。義経の奇襲で平氏は更に海の拠点も失います。

そして、壇ノ浦（だんのうら）の合戦に至ります。

安徳天皇の母である平徳子は、壇ノ浦の戦で安徳天皇と入水します。しかしながら、徳子は生き残り、京に送還され、出家します。徳子の出家後の名前は、建礼門院（けんれいもんいん）と言います。皆様には、こちらの方が、通りが良いかもしれません。京都大原にある寂光院（じゃっこういん）で安徳天皇と一門の菩提を弔いました。

親鸞聖人が数え年の９歳になり得度して比叡山の登るのは、養和元年（１１８１年）です。平家が没落し、源平合戦が勃発して、乱世になる中のことです。

【親鸞聖人の得度】

『御俗姓御文』に、

「しかればすなわち、生年九歳のはるのころ、慈鎮和尚（じちんかしょう）の、門人につらなり、出家得度して、その名を範宴（はんねん）少納言の公（きみ）と号（こう）す」

という記述があります。

つまり、親鸞聖人は慈鎮和尚の元で、９歳で僧侶となる儀式の得度をして、比叡山に登ります。

親鸞聖人が青蓮院の慈鎮和尚を訪れたのは夕方遅かったので「得度は明日にしましょう」と言われたのですが、「明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは」といって、その日のうちに得度したという逸話があります。「今は美しく咲いている桜も、夜中に嵐が吹けば散ってしまうかもしれません。私の命も同じです。明日まであるとは限りません。だからこそ、今すぐ得度をさせてください」という切実な願いが込められていました。

朝廷が権力争いに明け暮れ、権勢を誇っていた平清盛が亡くなり、壇ノ浦の合戦で平家が滅亡し、木曽義仲が京都で暴れたという時代に加え、自分を養育して生きた実の父である日野有範が出家、養父となる日野範綱が配流された環境に生きる親鸞聖人が、一日でも早く得度して、比叡山に入りたいという気持ちになるのは納得できるような気がします。

（注）覚如上人が親鸞聖人の直弟子から直接聞き書きした『親鸞聖人伝絵』では、「建久元年（１１９０年）、九歳にして得度し給ふ」とあり、得度の年代に違いがありますが、今回はお生まれになった承安三年（１１７３年）からの計算に従って養和元年としてお話を進めます。

親鸞聖人の得度は、様々な選択肢の中から仏門を選んだというよりは、仏門を選ぶしか生きる道がなかったというように理解したほうが良いと思います。

しかし、この得度は阿弥陀様のお導きと私は感じてしまいます。

【比叡山の親鸞聖人】

親鸞聖人が比叡山で修行している間に、日本の勢力図は大きく変わります。

源頼朝は大将として平氏を壇ノ浦で倒したという功績をあげます。ところが、安徳天皇が入水して亡くなり、天皇家の三種の神器が失われました。源頼朝は天皇を生け捕りにして、三種の神器を取り戻すことを平氏追討の武将に告げていましたが、残念ながら源義経はそれを果たせませんでした。

日本の歴史の中で、戦乱で落命した天皇は、安徳天皇しかいません。

源義経は、源平合戦で武勲をあげ鎌倉に凱旋しますが、後白河院から勝手に官位を受けたことや鎌倉の軍制を無視した行動を咎められ、腰越の満福寺に留め置かれ頼朝との再会ができませんでした。そこで、義経は討ち取った平宗盛（たいらのむねもり）親子を連れて京都に戻ります。そして、源頼朝から絶縁されると、弁慶とともに奥州に逃れます。最後には、源頼朝は義経が身を寄せていた奥州藤原氏を滅ぼします。もちろん、義経の人気が高まり、頼朝の権威を脅かしたことも義経追討の原因かもしれません。

奥州には金山があり、中尊寺は黄金に荘厳されていました。更に、毛越寺は極楽浄土を模した庭園がありました。奥州合戦で、この絢爛豪華な仏教施設に圧倒された源頼朝は、鎌倉の二階堂にこれを模した永福寺（ようふくじ）を建立しました。

建久元年（１１９０年）源頼朝は上洛します。『吾妻鑑』によると、後白河上皇から、右近衛大将に任じられますが、即日辞退します。

右近衛大将は都の警護をする武家の大将という名誉のある役職です。しかし、辞退した理由は、この役を受けると、京都にとどまり、鎌倉に戻れないからとも、奥州藤原氏を討っても東国を固めるためには京都で官職を勤めている暇などないからとも言われています。

その後、源頼朝は建久十年（１１９９年）に落馬したことが原因で急逝します。頼朝は弓馬（きゅうば）の名手でしたので、落馬をしたのは糖尿病だったのではないかと言われています。東海道線の辻堂駅前に落馬したと言われる場所があります。この前年に梶原景時が失脚し、梶原氏が滅亡するという事件があります。頼朝が亡くなり、改元され１１９９年は正治元年になります。大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」で描かれていた鎌倉幕府の血なまぐさい内乱の時代が始まります。

【専修念仏との出会い】

『御俗姓御文』に

「それよりこのかた、楞厳横川（りょうごんよかわ）の末流（まつりゅう）をつたへ、天台宗の碩学（せきがく）となりたまひぬ。

そののち二十九歳にして、はじめて源空聖人（げんくうしょうにん）の弟子となり、真宗の禅室（ぜんしつ）にまゐり、上足（じょうそく）の弟子となり、真宗一流をくみ、専修専念（せんじゅせんねん）の義をたて、すみやかに、凡夫直入（ぼんぶじきにゅう）の真心をあらはし、在家止住（ざいけしじゅう）の愚人ををしへて、報土往生（ほうどおうじょう）をすすめましましけり。」

現代語訳を以下に示します。

「それから比叡山の横川（よかわ）の源信僧都（げんしんそうず）の教えの伝統の中で修行し、天台宗の学問を極めた方になりました。

そのあと、二十九歳になられたとき、法然上人の本願念仏の教えに遇い、上人の優れた弟子となって念仏に専念することに価値を見出して、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。そして、出家をせず、苦悩している愚かな者に、速やかに阿弥陀如来の光明の世界である真実報土に生まれるようすすめられました。」

このように、親鸞聖人が専修念仏に目覚められたのは２９歳のときです。これは、建仁元年（１２０１年）にあたります。

源頼朝が亡くなって２年後のことです。

しかし、親鸞聖人が比叡山から降りて、京都市中の六角堂に百日間参籠（さんろう）し、法然上人の吉水という草庵に身を寄せることも、源氏の世になって、平家の横暴や焼討などの武力を恐れず、一心に念仏を称え阿弥陀様の本願を信じることができる時が来たという事なのかもしれないと思います。

【おわりに】

親鸞聖人がお生まれになり、得度して比叡山に登り、吉水の草庵で法然上人に弟子入りするまでの間、歴史的には激動の時代でした。父の日野有範の不幸から比叡山に登ることになったという流れと理解します

が、この出来事がなければ、浄土真宗の開祖となることはなかったということを思うと、阿弥陀如来のお導きというように思われてなりません。

次回は、承元（じょうげん）の法難や京都にお帰りになる時代についてお話ししたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

浄土真宗

安養山　正信寺